

【共同研究】

小中学生の障害者に対する意識

藤田 雅子・日浦 美智江

School Children's Consciousness of the Disabled

Masako Fujita and Michie Hiura

Social consciousness of the disabled is very important to build our welfare society. The youth is to bear the responsibility for the coming age. The aim of this study is to make researches in school children's consciousness of the disabled.

They belong to the fifth and sixth grade of two elementary schools, and the first to third grade of two junior high schools. Their age is about ten to fifteen years old. One of the elementary schools has the special class for the mental retarded and is near a day center for the severely multiple disabled. The other one has no special class, but in the same district there is the special school for the blind. One of the junior high school is near a day center for the severely disabled. The other one has no special class and is in the area neither special school nor institution for the disabled. Seven hundred seventy two school-children answered the questionnaire.

Question no.1 and 2 are about indirect experiences about the disabled. Namely they have known or not the disabled through biography, movie or TV. No.3, 5, 7 and 9 are about personal contact with the visual disabled, the auditory disabled, the motor disabled and the mental retarded. No.4, 6, 8 and 10 are their feeling of these disabled. No.11 and 12 are their direct experiences of the person with white cane and the person on the wheelchair. No.13 and 14 are about the chance of meeting or knowing each other. No.15 is about volunteer for social welfare activities. No.16 asks the thinking if they were parents of the disabled child in future. No.17 is about jobs related the disabled. School children choose yes, no or no answer. Each question has four to six subquestions. "Who is the person putting up with inconveniences?" This no.18 requires children to describe their answer. "What is your idea for well-to-do the disabled?" Describing answer is asked to this question, no.19.

1.8 to 3.8% children have the disabled brother or sister. 3.5 to 17.8% have the disabled relatives or friends. 24.4% to 92.5% know the disabled around them. Three fourths of the junior high school students are aware of the mental retarded. In the elementary school having the special class and the junior high school near the institution for the disabled, children meet more frequently than in the other schools. About half to 70% children wish to study and play with the disabled. But fewer children in the school with special class want to be with the mental retarded. Fewer children knowing the blind want to live with the visual disabled. Fewer children knowing the severely handicapped want to coexist with the motor disabled. Knowing

sometimes makes child careful.

Much more children who can describe their own ideas are in the elementary school having special class and the junior high school near the day center for the disabled. The contents written by these children are supported by their realistic experience in daily life. The interchange of personnel is important.

The result between quantitative and qualitative seems to be contradictory. It is the reason why developing consciousness of the disabled is step by step. Generally at the start the disabled is indifferent. By meeting the disabled, people are psychologically stimulated and then some responses occur like interest, pity, sympathy or rejection. A small number of them set up the constructive relationship with the disabled and the real coexistence-feeling springs up. For building up the actual welfare society, the constructive relationship and the coexistence-feeling are very important, considering as a whole. If the abled are mixed with the disabled, mutual understanding is not easy. The task imposed on our society is how to correct ignorance to the disabled and enhance the feeling of pity or sympathy to the coexistence-feeling.

I 目 的

福祉社会構築の基盤をなす障害者に対する社会の意識を把握することを目的とする。心身に障害をもつ人が、幼くしては親の愛に育まれ、学校教育期間にあっては学校を含む社会と家庭との連携により人生の基盤を培い、青年期にあっては自立の芽生えが尊重され、成人に達しては一社会人として自己決定が可能な生活を送る。このように普通かつ当然の生活は、障害者自身、家族、福祉関係者などの努力のみによって達成されるものではなく、社会意識総体の成熟が前提となるからである。社会の意識の構造を多面的かつ立体的に把握する必要があると考える。これまでの一連の研究の一環として、今回は子ども世代の小中学生を対象に障害者に対する意識を把握することを目的としている。子どもは次代の担い手であり、福祉社会構築の重要な要素となると考えるからである。

II 方 法

1. 調査対象者

調査対象の小学生と中学生は表1に示すように、横浜市内の小学校2校と中学校2校に

通学する合計772名である。小学校5～6年生（特殊学級のないa小学校80名と、特殊学級があり、障害者通所施設が近くにあるb小学校139名）と中学生（学内に特殊学級がなく、近隣に障害者施設もないA中学校180名と、特殊学級はないが障害者通所施設に隣接するB中学校373名）に対する意識調査である。

表1 調査対象の小中学生

(数字は人数)

a小学校	男子 40	80	A中学校	男子 90	180
	女子 40			女子 90	
b小学校	男子 64	139	B中学校	男子 197	373
	女子 75			女子 176	
小学生計	男子 104	219	中学生計	男子 287	553
	女子 115			女子 266	
小中学生の合計		男子 391	男女合計 772 (名)		
		女子 381			

各学校の特徴 a小学校 特殊学級なし
b小学校 特殊学級あり
近隣の障害者施設と交流
A中学校 特殊学級なし
B中学校 特殊学級あり
近隣の障害者施設と交流

2. 調査方法

障害者との接触経験が直接、間接にどの程度あるか、さらに小中学生は障害児・者を受容するのか排除するのか、あるいは無関心なのか、共生を望むのか、そうではなく分離を望むのか。これらについて分析を試みるために、一部記述式の質問紙を用いた。小中学生に共通の質問項目を用いた。

質問紙の概略は次のとおりである。間接経験（伝記・映画・テレビ。Q1～Q2）、障害者との接触経験（Q3視覚障害者・Q5聴覚障害者・Q7肢体不自由者・Q9知的障害者）とこれら障害者に対する気持ち（Q4視覚障害者・Q6聴覚障害者・Q8肢体不自由者、Q10知的障害者）、直接的な経験（Q11白杖の人・Q12車椅子の人）、障害者との出会いの機会（Q13公共輸送機関と障害者・Q14障害者と知り合う機会）といった、障害者とのかかわりに関する内容が14項目ある。他に、ボランティア活動（Q15）、障害児の親になった場合（Q16）、障害者関係の仕事に対する意識（Q17）の3項目を加えて、選択式が17問ある。これらの各々に下位の質問項目が4～6項目含まれる。さらに記述式の質問が2問（Q18不自由な思いをしている人・Q19障害者が共に生きる社会の構築へのアイデア）あり、合計19問になる。表2と表3に例を示す。

表2 障害者との接触経験と障害者に対する気持ち（質問例）

ねらい	番号	質問	回答
(接触経験)	Q7.	手足が不自由な人に会ったことがありますか。(はい・いいえ)	
		↑	
傍観的経験		「はい」と答えた人は、次の質問に答えて下さい。	
直接的経験		① 町を歩いているときに見かけましたか。(はい・いいえ)	
		② 電車やバスで見かけましたか。(はい・いいえ)	
		③ 手足が不自由な子の学校へ行ったことがありますか。(はい・いいえ)	
		④ 親せきや友だちに手足の不自由な人がいますか。(はい・いいえ)	
(気持ち)	Q8.	手足が不自由な人についてあなたの気持ちを答えてください。	
同情(1)		① 手足が不自由な人はいかかわりそうですか。(はい・いいえ・どちらでもない)	
同情(2)		② 手足が不自由な人はいかかわりたいへんだと思いますか。(はい・いいえ・どちらでもない)	
違和感		③ 手足が不自由な人は特別な人だと思いますか。(はい・いいえ・どちらでもない)	
共感(1)		④ 手足が不自由な子と友だちになりたいですか。(はい・いいえ・どちらでもない)	
共感(2)		⑤ 学級に手足が不自由な子がいたら、いっしょに遊んだり、勉強したりしますか。(はい・いいえ・どちらでもない)	

表3 障害者との直接的経験と出会いの機会（質問例）

ねらい	番号	質問	回答
(直接経験)	Q11.	目の不自由な白い杖をついた人が、迷子になっている様子を思い浮かべて下さい。	
直接的行動		① 「どうしましたか」と声をかけますか。(はい・いいえ・どちらでもない)	
直接的行動		② 大人に「助けてあげて」と知らせますか。(はい・いいえ・どちらでもない)	
傍観的経験		③ 自分ではなにもできないと思いますか。(はい・いいえ・どちらでもない)	
積極的行動		④ 手伝う方法を知っておきたいですか。(はい・いいえ・どちらでもない)	
無関心		⑤ 自分とは、あんまり関係ないと思いますか。(はい・いいえ・どちらでもない)	
(出会い)	Q14.	どんなところで、障害のある人や、障害のある子どもと知り合いになっていますか。	
友人関係		① 友だちに、障害のある子どもがいますか。(はい・いいえ)	
親せき関係		② 親せきに、障害のある人や障害のある子どもがいますか。(はい・いいえ)	
兄弟姉妹		③ きょうだいに、障害のある子どもがいますか。(はい・いいえ)	
交流教育(1)		④ 障害のある子どもの学校へ、行ったことがありますか。(はい・いいえ)	
交流教育(2)		⑤ 障害のある子の学校から、障害の子があなたの学校に来ましたか。(はい・いいえ)	
施設訪問		⑥ 障害のある子の施設に、行ったことがありますか。(はい・いいえ)	

Ⅲ 結果と解釈

1. 障害者との出会い

表4に示すように、直接経験として親戚や友達に障害児・者がいると答えた率は3.5%~17.8%となっており、特に知的障害者は中学生になると10数%に達している。表5も合わせて見ると、障害の種類は明らかではないが兄弟姉妹に障害児のいる者も1.8%~3.8%の範囲となっている。

どんな出会いであるかは別にして、表6に示すように、24.4%~92.5%は障害児に出会っている。a小学校は特殊学級のない小学校という観点で調査対象にしたが、地域に盲学校があり視覚障害児との出会いについては90%以上の数値を示し、a小学校の児童のほとんどがその学校(盲学校)の障害児を視覚障害児として認識していることがわかる。しかしb小学校は学校内に特殊学級があるにもかかわらず、知的障害児に会ったという児童は3/4にとどまっており、必ずしも児童の意識に、特殊学級の子が知的障害児として映っているわけではない。もちろん特殊学級のあるb小学校の方が、特殊学級のないa小学校よりも、知的障害児との出会いの率は高い。中学生になると、A中学校もB中学校も3/4の生徒が知的障害児にどこかで出会っており、障害別では知的障害児との出会いの率は高い。知的障害の発生率が他の障害より高いことを考えれば、妥当な数値であろう。なお障害別では全体的に聴覚障害に関しては出会いの率が低い。知的障害を除けば、中学生より小学生のほうが、視覚障害、聴覚障害、肢体不自由いずれにおいても障害児・者と出会っている。生活経験の少ないはずの小学生の方が中学生よりも障害者と出会う機会が多いのか。不思議な結果である。

障害者と知り合いになった理由を見てみよう。表5に示すように、兄弟姉妹や親戚に障害者がある(兄弟姉妹1.8%~3.8%。親戚3.9%~8.8%)という理由以外は、障害児の施設や学校の訪問、逆に障害児が自分の学校

を訪問という理由が大きい。しかも特殊学級があるとか、あるいは障害者施設が近接するb小学校やB中学校のほうが、出会いの数値が圧倒的に高い。いわゆる交流教育の意義が認められる結果である。その出会いが子どもの心にどのような変化を起こすかは、次のステップの問題である。

表4 親戚や友達など身近に障害者がある

障害者	学 校		中 学 校	
	a	b	A	B
視 覚 障 害 者	8.8	5.0	5.6	3.5
聴 覚 障 害 者	8.8	10.1	5.6	6.4
肢 体 不 自 由 者	5.0	3.6	6.1	7.0
知 的 障 害 者	8.8	10.1	多17.8	多15.3

数字は%を示す

表5 障害者と知り合いになった理由

理 由	学 校		中 学 校	
	a	b	A	B
友 達 に い る	12.5<35.2	20.6≒22.2		
親 せ き に い る	8.8	5.0	3.9	6.4
兄 弟 姉 妹 に い る	3.8	2.9	2.8	1.8
障 害 児 学 校 訪 問	12.5<33.1	9.4<27.0		
障 害 児 が 訪 問	5.0<46.0	4.4<27.3		
障 害 児 施 設 訪 問	10.0<49.6	3.9<30.0		

数字は%を示す

表6 会ったことがある

障害者	学 校		中 学 校	
	a	b	A	B
視 覚 障 害 者	92.5 >> 68.3 (>)	43.3	57.6	
聴 覚 障 害 者	42.5 ≒ 48.2 (>)	24.4 ≒ 30.3		
肢 体 不 自 由 者	73.8	65.5 (>)	47.8	59.5
知 的 障 害 者	47.5 << 75.5	78.3 ≒ 75.3		

数字は%を示す

2. 共生への意識

① 共に生活する意識

小中学生は、障害者との共生をどのように

考えているだろうか。まずは一緒に遊んだり勉強したりしたいという回答で、共生への意識を見ている。結果は表7に示すが、全体としては、障害を問わず、学校を問わず、半数以上（約50～70%）が共生を望んでいることがわかる。

ただし、例外的に特殊学級をもつb小学校の児童は知的障害児に関して慎重であって、40%を切っているのが特徴的である。小学校では、視覚障害児に関しては盲児をあまり知らないb小学校のほうが地域に盲学校のあるa小学校よりも、一緒に遊んだり勉強したいと答えている。また知的障害児に関しては特殊学級のないa小学校のほうが、特殊学級のあるb小学校よりも、一緒に遊んだり勉強したいと答えている。個人的な体験は別として障害児に関して出会いがないと思われるA中学校のほうが、その機会が豊富なB中学校よりも、いずれの障害においても共に学び共に遊びたいと答えている。

小学生も中学生も、出会いがあっても、共生やインテグレーションへと直接的に結びつかない。逆に、慎重派が多くなる傾向が見られる。どのような出会いが子どもの心に入り込むかが問題である。

② サポートする意識

表8に白杖の人が迷子になっていたら、表9に車椅子の人が階段で困っていたら、小中学生はどうするかという考えを示す結果がある。障害者が困っていたら、自分なりに行動すると答えるのはいずれにおいても中学生より小学生のほうが率が高い。

盲人の介助に関しては盲学校が近くにあるa小学校のほうが、日常的に出会いのないb小学校よりも行動に移そうという率が低い。また日々車椅子の人々を目にしているはずのB中学校のほうが、その機会が少ないと思われるA中学校よりも低い。現実を目の当たりにしている児童や生徒の方が、個人としては積極的な行動を取りにくい。

表7 一緒に遊んだり勉強したい

障害者	学校		中学校	
	a	b	A	B
視覚障害者	58.3	< 72.7	70.6	> 61.4
聴覚障害者	67.5	> 63.3	61.1	> 58.7
肢体不自由者	67.5	> 60.4	61.7	> 55.2
知的障害者	63.8	> 39.6	58.9	> 50.7

数字は%を示す

表8 白杖の人が迷子になっている時の行動

障害者	学校		中学校	
	a	b	A	B
声をかける	63.8	< 70.5	55.6	> 少27.9
大人に知らせる	47.5	< 51.8	30.0	> 少13.9
介助方法知りたい	80.0	≒ 78.4	66.7	> 少30.6
なにもできない	26.3	23.0	23.3	20.6
自分と関係ない	3.8	7.9	4.4	6.7

数字は%を示す

表9 車椅子の人が階段で困っている時の行動

障害者	学校		中学校	
	a	b	A	B
声をかける	57.5	< 75.5	62.2	> 35.6
大人に知らせる	48.8	< 74.1	45.6	> 22.5
介助方法知りたい	78.8	≒ 73.3	70.6	> 少26.5
なにもできない	31.3	多 19.4	19.4	≒ 19.0
自分と関係ない	7.5	≒ 5.8 (≒)	5.6	≒ 6.1

数字は%を示す

③ ボランティア活動と共生

共生の具体的行動として、ボランティアについて結果を質と量の両面を見てみる。

表10はボランティアの経験を記述式で回答したもの（Q15-5）を学校別、男女別に整理したものである。表11は今後やってみたいボランティア活動（Q15-6）を同じ観点からまとめた。小学生と中学生が、このように幅広いボランティア経験と、これからの抱負を抱いていることは、共生への意欲はある結果と解釈でき、障害者と交流への見込みがあると考えられる。

小中学生の障害者に対する意識

b小学校やB中学校の方が、回答がより具体的である。表10の中では、b小学校女子「老人に本を読んであげた」、B中学校女子「聴覚障害者のための映画に字幕を入れた」などはその例である。これからやりたいボランティアにしても(表11)、b小学校女子「目の見えない人と歩く」、B中学校男子「青年海外協力隊」、B中学校女子「地域や障害のある人の役に立つこと」とより具体的かつより社会性を帯びたものになっている。

具体的な記述の背景にある数値を見ておく(84ページの表14)。小中学生の約10~26%

が何らかのボランティア活動の経験があると答えており、やりたいボランティア活動に関してもほぼ同じ割合の約9~30%が具体的に答えている。男女別では例外はあるが、小学生も中学生も女子の方が多く書いている。学校別の特徴として、Q15-5の記述式回答に答えた児童が、b小学校で25.9%、Q15-6で同じくb小学校で29.5%に達しており、他の3校とは異なる様相を示している。b小学校には特殊学級があり、しかも近隣の障害者通園施設との交流があることなどが結果として表れていると考えられる。

表10 ボランティアの経験

学校別	ボランティア活動の内容
a小学校男子	募金活動
a小学校女子	募金・障害者の手伝い
b小学校男子	缶拾い・募金・町の掃除・公園の清掃
b小学校女子	施設を訪問し一緒に歌を歌ったり、踊りをした(2) 空き缶つぶし・募金・車椅子を押して散歩・公園の掃除・老人に本を読んであげた・その他
A中学校男子	川のごみ拾い・少年野球チームのコーチ・外国人のホームステイ・ボーイスカウトで障害者の訪問・その他
A中学校女子	ごみ拾い・募金・老人ホーム訪問・空き缶集め・ガールスカウト・劇をやって見せた・サマーボランティア
B中学校男子	缶拾い・募金・掃除・養護学校での交流・施設のバザー手伝い・猫の死体の片づけ・障害者の遊び相手・老人ホーム訪問
B中学校女子	障害者の遊び相手・障害者の話し相手・募金・施設で演奏活動・施設でバスケットやバザーと一緒にやった・ユニセフ募金・老人ホームの手伝い・バザー・公園の掃除・聴覚障害者のための映画に字幕を入れた

表11 これからやりたいボランティア

学校別	やりたいボランティアの内容
a小学校男子	募金・空き缶集め・障害者の手伝い(2)・町の清掃
a小学校女子	障害者の手伝い
b小学校男子	募金・町の掃除・空き缶集め
b小学校女子	障害の子と遊ぶ(2)・障害の子と散歩する・人のためになること・車椅子を押したり、食事の世話・目の見えない人と歩く・施設の手伝い(2)・障害者の身の回りの世話・バザーの手伝い
A中学校男子	病院・老人ホーム・体の不自由な人の役に立つ・掃除・赤い羽根共同募金・自分にやれそうなもの
A中学校女子	他人のためになること・老人ホーム・自分でできること・年寄りの話し相手・掃除・障害者の世話・障害者を助けたい・障害者の友達になる・ごみ拾い・募金活動
B中学校男子	掃除・老人や障害者の世話・他人のためになること・楽しいこと・青年海外協力隊・福祉関係・不自由な人・障害者との交流・自己満足におわらないこと
B中学校女子	役に立つこと・障害者の散歩・孤児院の子と遊ぶ・募金・手伝い・老人ホームでの手伝い・障害者施設での手伝い・障害者と一緒に文化祭をしたい・音楽の演奏を教える・老人の話し相手・貧しい国へ行って助けたい・身近で自分のできる範囲のこと・体の不自由な人の手伝い・障害者と話しをしたり日常生活の手伝いをしたい・人助け・バザーの手伝い・人々の意識改革・町の掃除・盲導犬の飼育・障害者に劇をする・自分のできること・地域や障害のある人の役に立つこと

3. 共生の促進

① 他人の不自由さを思う心

自分以外の他人を認めるところから共生は出発する。

どのような人が不自由な思いをしているかを記述式で尋ねたところ、表14に示すように、46.7～74.1%が、平均すると半数以上が回答している。回答率は、a小学校<b小学校、A中学校<B中学校という結果になっている。

内容的には、表12に示すように、視覚障害、聴覚障害、肢体不自由、知的障害、言語障害が、表現の仕方に違いがあるにしても障害の種類別に出てきている。小学生よりも、中学生の方が、より具体的に広く考える傾向が見られる。小学生も中学生も障害のみならずかなり広範囲に「不自由な思いをしている人」を把握している。

子どもはさまざまな立場で不自由な思いをしている人々をよく知っている。障害者以外に特徴的なことをランダムに拾うと、老人が目につく。表現は、独り暮らしの老人、家族のいない年寄り、家族に捨てられた老人などさまざまであるが、小学生でアルツハイマーの人(b中学生男子)を書いている。中学生では、いじめにあっていて人(A中学校男子と女子・B中学校女子)などは、現在の中学校のいじめ問題との関連で気になるところである。太っている人(b小学校男子、A中学校女子)なども思春期の子どもにとって重大な事からであることが推測される。教育や啓蒙活動の成果と推測される回答として、難民、同和地区出身者、エイズ感染者、身売りをしている女の、外国人労働者などがある。

② 共生のためのアイデア

では、いかにしたら障害者も不自由のない暮らしができるかというアイデアを出してもらった。具象的な回答を表13に示す。

数的な結果は表14に示すように、平均すると2人にひとりは何らかの考えを記述している。回答率は不自由な人の記述と同様に、a小学校<b小学校、A中学校<B中学校という結果になっている。自分の近くに障害の人

と接する機会がある児童や生徒の方が、共に生きる社会を目指す傾向があり、しかもそのための考えが具体的、現実的である。

アイデアの内容を大きく5種類に分類し表13に記号を示すが、現実的でぜひ取り入れたいアイデア(◎)、自分あるいは社会の意識の問題や協力(○)、町づくりや、福祉機器開発など物理的環境の整備(□)、障害者などの施設や学校の増設(☆)、その他(●)である。これらの他に、なぜこのようなアイデアが出てくるのか、首をかしげたくなるほど拒否的な考えが気になったために、ごく少数であるが別個に記号(▼)をつけて区別した。

◎を見てみると、小学生の年齢でも、障害者と一緒の活動をする、障害者の施設に障害のない人も入れる施設をつくる、団地の中に障害者が住める施設をつくるなど建設的なアイデアが出されている。中学生になると、小学校と中学校で障害者と交流する体験学習をする、生活に必要な場所に障害者も暮らせるようにする、というような回答の他に、自分が障害のある身になって考え、接することが大切だが、これは学校で勉強するのではなく、直接、施設などを訪問した方がわかり合えるというように、経験的な考えも示されている。

反面、▼にあるように、どうせ国のためにならないのだから、死ねばいい、生まない、という小学生の女子(b小学校)や、障害者をひとつの大きな島に集めて住ませる、という中学生男子(B中学校)がいることも現実である。☆にあるように、▼ほど極端でないにしても、障害者の施設や学校を増やすという、いわゆる隔離主義が子どもたちの間に根強くあることも事実である。

□にあるように物理的環境の整備に関しては、小学生も中学生もかなり情報を持っていることがわかる。○にあるように、気持ちの上では、共生社会を目指そうという意気込みが感じられる回答になっている。小中学生の考える○や□の部分の部分が総合的に社会に定着すれば、自然に福祉社会が構築できるはずである。

小中学生の障害者に対する意識

表12 不自由な思いをしている人

学校別	不自由な人
a 小学校男子	しゃべれない人・歩けない人・知恵遅れの人・目の不自由・耳の不自由・外国人・障害の人・臭い人・変態・ルンペン
a 小学校女子	手が不自由・耳が聞こえない人・足が不自由な人・口がきけない人・外国人・知恵遅れの人・目の悪い人・話しができない人・車椅子の人
b 小学校男子	普賢岳で被害を受けた人・雪がたくさん降る町の人・障害者・外国人・目の見えない人・手足が不自由な人・耳の聞こえない人・口がきけない人・知恵遅れの人・ノイローゼの人・アル中の人・アルツハイマーの人・太りすぎの人・日本語の分からない外国人
b 小学校女子	目の不自由な人・耳の不自由な人・口のきけない人・手足の不自由な人・知恵遅れの人・家のない人・寝たきりの人・転んでけがをしている人・日本語を話せない人・仕事の見つからない人
A 中学校男子	手足の不自由な人・難民・差別されている人・独り暮らしの老人・いじめられる人・障害のある人たち・同和地区出身者・家族が事故で亡くなった人・目の見えない人・耳の聞こえない人・口のきけない人・老人・日本語の話せない外国人・知能に障害のある人
A 中学校女子	在日外国人（言葉が通じない）・お年寄り・子だくさんの親・差別されている人・目の不自由な人・耳が不自由な人・知恵遅れ・手足の不自由な人・ずっと病院で暮らしている人・戦争でけがをした人・エイズ感染者・太っている人・天皇・親のいない子・家族のいない年寄り・話せない人・生まれつき何かをもった人・いじめられる人・家族に捨てられた老人・就職できない人・字が読めない人
B 中学校男子	外国人・体に障害のある人・目の見えない人・手足が不自由な人・耳が聞こえない人・老人・日本語が話せない外国人・知恵遅れの人・しゃべれない人・失業者
B 中学校女子	障害の人で職につけない人・体のどこかが悪い人・寝たきりの人・消極的な人・お年寄り・障害を持っている人・難民・いじめにあっている人・外国人労働者・身売りをしている女の人・独り暮らしの老人・歩けない人・しゃべることができない人・目の不自由な人・耳が不自由な人・車椅子生活の人・生まれながらの病人・心の病がある人・けがをしている人・女子大生・孤児・帰国子女

表13 不自由のない暮らしのためのアイデア

記号説明 ◎現実的考え ○意識や協力 □物理的環境整備
☆施設や学校の増加 ●その他 ▼否定的考え

学校別	不自由のない暮らしのためのアイデア
a 小学校男子	<ul style="list-style-type: none"> ☆ 施設を増やす ○ ボランティアをたくさん増やす □ ロボットがやる ● 薬を開発する ● 小学校に、障害児のための先生を置く □ 手足に替わる道具を発明する ● 治療法を開発する ☆ 特殊な学校を増設する ● 治療薬を発明する

a 小学校女子	<input type="radio"/> 不自由な人のために頑張る <input type="radio"/> 軽蔑しない <input checked="" type="radio"/> 障害者と一緒の活動 <input type="checkbox"/> 電気の車椅子を使う
b 小学校男子	<input checked="" type="checkbox"/> 施設をつくる <input type="checkbox"/> 駅などにエレベータを設置する <input checked="" type="radio"/> 目や耳の不自由な人のために、人の集まるところに案内の人を置く <input checked="" type="radio"/> 学校にボランティアを入れる <input type="radio"/> 障害の子と遊ぶ <input checked="" type="radio"/> 政府が補助金を出す <input type="radio"/> 助け合い、仲良くする <input type="radio"/> 障害者を助けて一緒にいきたいところに行く <input checked="" type="checkbox"/> 不自由な人の保護センターをつくる <input checked="" type="radio"/> 障害者の施設の中に、障害のない人も入れるところをつくる <input type="radio"/> 手話を覚える <input type="checkbox"/> 盲導犬を増やす <input type="checkbox"/> 点字ブロックの上にものを置かない <input type="checkbox"/> 車椅子より、もっとよい椅子をつくる
b 小学校女子	<input type="radio"/> 目の不自由な人の介助方法を教えてくれる会を開く <input type="checkbox"/> 電車やバスを乗りやすくし、シルバーシートを増やす <input type="checkbox"/> 町中を歩きやすくする <input checked="" type="checkbox"/> 施設をたくさんつくる <input type="checkbox"/> 車椅子も入れるバスや電車を増やす <input checked="" type="radio"/> もっと障害者と交流ができるようにしたい <input type="radio"/> だれもが助けることができるようにしたい <input type="radio"/> 差別をなくしたい <input checked="" type="radio"/> なるべく普通の学校にいれてあげて、みんなと学ぶようにする <input type="radio"/> 障害のある人がいることを心がけておく <input checked="" type="radio"/> 政府が税金でなんとかする <input type="checkbox"/> 点字を増やす・音の出る信号を増やす・シルバーシートを増やす <input checked="" type="radio"/> 団地のなかに、障害者が住める施設をつくる <input type="radio"/> みんな手を貸してあげる <input type="radio"/> 助け合っていけばいい <input type="checkbox"/> 盲導犬を増やす・階段を低くする <input type="checkbox"/> 言葉の出る地図を作る <input checked="" type="checkbox"/> どうせ国のためにならないのだから、死ねばいい、生まない <input type="checkbox"/> 階段を上がる車椅子を作る <input checked="" type="radio"/> 赤ちゃんを産む時、たばこを止める <input checked="" type="radio"/> おなかの赤ちゃんのために栄養をつける
A 中学校男子	<input type="radio"/> 差別を無くす <input type="checkbox"/> 点字ブロックをつくる <input checked="" type="radio"/> 政策の中に社会福祉の制度をつくる <input checked="" type="radio"/> 小さいうちから、家庭や学校の中に取り入れる <input checked="" type="radio"/> ボランティア党をつくる <input type="radio"/> 障害者を特別扱いない <input type="radio"/> 暮らしやすい社会づくり <input type="checkbox"/> 点字ブロック、シルバーシート、音の横断歩道などを増やす

小中学生の障害者に対する意識

	<ul style="list-style-type: none"> ☆ 施設を増やす ● ビデオなどで障害者の様子を知らせる ● 医学を発達させる ○ 普通の人と同じように暮らせるように、障害のある人にやさしくする ○ ボランティア活動を活発にする ○ 障害者をよく理解する ○ 障害者を仲間はずれにしない ○ 普通の学校に通うようにする ○ みんなで協力しあう ● 治す
A中学校女子	<ul style="list-style-type: none"> ○ 回りの人が協力する ○ ボランティア活動をたくさんする ◎ 小学校と中学校で、体験学習をする（障害者との交流をする） ☆ どの学校にも障害者のクラスをつくる ○ 平等にする ○ 普通に接することができればいい ☆ 普通の小学校、中学校に特別の学級をつくる ○ 環境づくり ○ 実行できる範囲でやる ○ 障害のある人が肩身の狭い思いをしないように、親切にしてやる ○ 一人一人が差別や偏見をなくす ○ みんなで協力する □ 町の（道路の）段差を低くする ○ ボランティアをする ● 芸能人を呼んでボランティアをしてもらう ○ 障害者についての知識をたくさんの人が身につけられるようにする □ 障害者でも、着やすい服をつくる □ 点字や手話を多くする □ 盲導犬を増やす ○ 「同情するなら金をくれ」だと思ふ。障害者は特別でない、自分と変わらないというが、矛盾している。特別でないならかわいそうとは思えない。もっと障害者について知ることが大切。障害者が我々をリードすべきである。 ○ 困っていることがあったら、すぐに助けて上げられるような環境をつくる ○ 障害者のいない家族が、障害者のいる家族の手伝いをする ○ 障害のある人となない人が一緒にすごす □ 足の不自由な人が歩きやすい道路をつくる ○ 対等に付き合っていける世の中にする ◎ 養護学校と普通の学校との交流 ◎ 障害のある人たちを中心に生活づくりをしていけばいい
B中学校男子	<ul style="list-style-type: none"> ○ 差別をしない ● 国会議員の人数を減らして、その費用で施設をつくる ● 国で、この問題を取り上げる □ 階段を少なくする ▼ 障害者をひとつの大きな島に集めて、住ませる □ バスなどで、車椅子用のステップをつける ○ みんなが仲良くなる □ エスカレータの設置 ◎ 生活に必要な場所に、障害者も暮らせるようにする

- 自動車椅子をつくる
- ☆ 医療施設をつくる
- 障害のある人でも話せ、聞こえる機械をつくる
- 障害者の人たちが、精神的に強くなる
- 困っていたら助ける
- ◎ 障害のある人も普通の学校に通えるように、小さい頃から障害のある人と遊び生活する
- 専門職をつくる
- パートやバイトを増やす
- ▼ あきらめる
- 資本主義の弊害を取り除く
- 障害者を変に意識しないで、普通に対応する
- 障害児をみんな、同じクラスに入れる
- シルバーシート、点字ブロック、点字図書を増やす
- 道にベルトコンベアをつける
- 公共施設に自動ドアをつける
- 「ふれあいフェスティバル」のような会をつくる
- 目の見えない人のために、センサーのついたメガネを作る
- 盲導犬を増やす
- ◎ 障害者の職場を増やす
- 僕たちが普通の人と同じように接する

B 中学校女子

- 障害者のことをよく理解していれば、解決する
- この世界には数え切れないほどの人が、数え切れないほどの考えをもっているから、アイデアを出しても不自由のない暮らしをするのは無理である
- ◎ 自分が障害のある身になって考え、接してあげることが大切だと思う。ただこういうことを学校で勉強するのではなく、直接施設などを訪問した方がわかり合えると思う
- 道徳心を養う
- 実際に接する
- 障害のある人たちが私たちと同じ生活をするのは無理だと思うけれどもできないことを手伝ってあげれば、同じ生活もできる
- 自分には障害がないから、どう助けていいのかわからない、行動に表せない
- ☆ よい施設をつくる
- もっとボランティア活動に参加する
- 今の社会では無理だと思う。私たちは不自由な人との接点がないので、違う感覚をもってしまって当然だし、私は不自由な人達に接するには戸惑いがある。知恵遅れの人や何を考えているのかわからないし、見た目にも左右されるボランティアをしている人は偉いと思うけど、自分はやりたくない
- 年に一度、月に一度でもいいから、不自由な人と一緒に活動すればいい
- 私たちは障害があるわけではないから、その人たちが求めている町作りをしたらいい
- 段差をなくし、エレベータをつける
- エスカレータを車椅子の人達のために、もっと広くする
- 人間どうしの助け合いで、不自由な思いをしない
- 差別をしない
- ◎ 障害者と地域ごとに交流会をする
- 不自由がなく、障害を乗り越えられるような環境作りが大切
- 普通に接する
- 町の通りに、むやみに自転車を置かない

小中学生の障害者に対する意識

- 偏見をなくす
- 助け合う
- かわいそうなんて思っはいけない
- そういう人助けはしたい人がやればいい。助けたくないなら、無理してやる必要はない
- 半端な気持ちで奉仕するならやらない方がいい
- 公共の場に手すりをつける
- 障害のある人も同じ学校で生活した方がいい。同じ人間なのだから
- 障害者だけのクラスを作らずに、みんなでやればいいと思う
- その人の気持ちになって考えればいい
- 社会保障制度の充実
- 積極的に協力する
- 障害者とのふれあいを増やす
- 障害の子が隣に住んでいる。普段、ほとんど外に出ないので、日曜日ぐらい一緒に遊んであげる会をつくりたい
- 意識しないで、普通に接すればいい
- 障害者の苦勞を知って、助け合う
- 不自由な人の体に合わせて、町を変えたい
- 信号機の音はいいが、方向がわからないので、方向がわかるように音を工夫する
- 手話を学校の科目に入れる
- 手話ができるようになりたい
- シルバーシートや点字ブロックを増やす
- みんなが思いやりをもつ
- 一緒に公園を掃除する
- ☆ 障害のある子の学級をたくさんつくる
- 金を持っている人は、こういうことに使うべき。家を貸さないのはもってのほか
- 障害のある人や子供と仲良くする機会があればいい
- 店の中に盲導犬を入れてもよいことにする
- もっと障害者のために気を使った方がいい。例えば点字ブロックに自動車を置かない
- 障害者はこれからもなくなるならない。出会ったら、普通の人と同じに接してあげればいい
- 特別な人と見ない
- 自分がそうなった時のことを考えて行動する
- お茶会で障害者と一緒になったことがある。初めは緊張したけど、だんだん仲良くなれてとてもうれしかった。そういうふれあいの機会が欲しい
- どの学校にも障害のある人の学級をつくり、交流すればいい
- もっと信号機に音をつける
- 障害の人も暗くならないで明るくしてほしい。そうすれば回りの人も話しやすくなる
- 障害のある人も一緒のところで暮らす
- 特別な人扱いをしない
- 近くの障害者施設のバザーで、「このような人がいることを知らなかった。驚いた」といっていた。みんなが障害の人のことを理解しておかなくてはいけないと思う
- 一人一人が勇気を持って手伝い、障害を持つ人と出会うことを何度も繰り返す
- 障害者にならないための注射をつくれればいい
- シルバーシートの前に老人が立っていても、40代くらいのおばさんがそこに座っている。シルバーシートを作るより、一人一人が気をつけて席を譲った方がいい

表14 記 述 式 回 答

(回答数・各学校内回答率・全体における回答率)

質問 回答 学校 性別	ボランティア の 経 験			や り た い ボ ラ ン テ ィ ア			不 自 由 な 思 い の 人			不 自 由 な く 暮 す ア イ デ ィ ア		
	回 答 数	学 校 内 回 答 率 (%)	全 体 中 回 答 率 (%)	回 答 数	学 校 内 回 答 率 (%)	全 体 中 回 答 率 (%)	回 答 数	学 校 内 回 答 率 (%)	全 体 中 回 答 率 (%)	回 答 数	学 校 内 回 答 率 (%)	全 体 中 回 答 率 (%)
a 小学校 男子	4	5.0	0.5	6	7.5	0.8	29	36.3	3.8	13	16.3	1.7
	4	5.0	0.5	1	1.3	0.1	21	26.3	2.7	9	11.3	1.2
計	8	10.0	1.0	7	8.8	0.9	50	62.5	6.5	22	27.5	2.8
b 小学校 男子	7	5.0	0.9	7	5.0	0.9	36	25.9	4.7	33	23.7	4.3
	29	20.9	3.8	34	24.5	4.4	67	48.2	8.7	71	51.1	9.2
計	36	25.9	4.7	41	29.5	5.3	103	74.1	13.3	104	74.8	13.5
A 中学校 男子	8	4.4	1.0	8	4.4	1.0	27	15.0	3.5	24	13.3	3.1
	12	6.7	1.6	24	13.3	3.1	57	31.7	7.4	57	31.7	7.4
計	20	11.1	2.6	32	17.8	4.1	84	46.7	10.9	81	45.0	10.5
B 中学校 男子	20	5.4	2.6	20	5.4	2.6	86	23.1	11.1	88	23.6	11.4
	33	8.8	4.3	43	11.5	5.6	131	35.1	17.0	121	32.4	15.7
計	53	14.2	6.9	63	16.9	8.2	217	58.2	28.1	209	56.0	27.1
小中学生合計	117名	15.2%		143名	18.5%		454名	58.8%		416名	53.9%	

IV 考 察

1. 共生意識の芽生えと福祉社会の構築

福祉社会構築にとって一般社会の意識の成熟が不可欠である。いかに成熟させるか？

同じ学校の中に知的障害児の特殊学級があっても、地域に特殊教育諸学校があっても、隣接して障害者施設があっても、児童・生徒の意識がノーマライズされるわけではない。

現実を知るほどインテグレーションや共生の困難さを認識し、慎重論や及び腰になる傾向が見られた。年齢が低いとかあるいは接触の機会が乏しいために障害児についてのイメージが漠然としている場合のほうが、単純に建前賛成の意識が反映されるという結果を見せつけられた。障害者の真の社会参加と統合を考えるならまず接触経験は大切で、次に来る現実的な困難さの認識を克服し、胸突き八丁を打開する方法を見つける必要がある。

記述式の回答結果から分かるように、接触経験の豊富な方が回答する人数も多いし、内容的にも範囲が広く、具体的かつ現実的である。不自由を感じている人への共感も、不自由なく暮らせる社会の構築への提言も、真摯である。

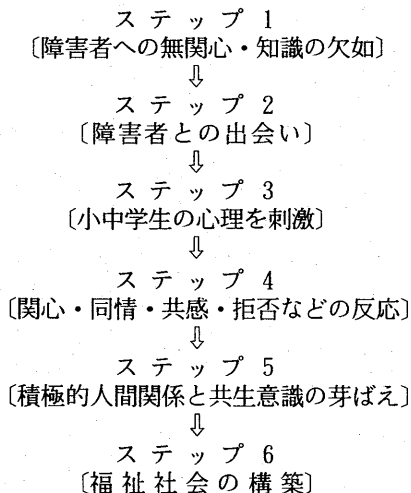
しかし数的な結果と質的な分析との間にギャップが存在するようであるが、小中学生の段階での出会いが新たな人間関係を形成するような作用が働かなければ、全体的に積極的な構えを築くまでにはならないのかもしれない。要するに、強制的に場を同じくしても、共感や共生への意識へ直結するという単純な図式は期待できないのである。

接触経験があるほど真摯な提言があると記したが、結果のところでも述べた、拒否的な意識（どうせ国のためにならないのだから死ねばいい、障害者をひとつの大きな島に集めて住まわせる）を臆せず表現したのも障害者と

接触経験のある学校の児童や生徒である。この複雑な結果を分析的に考察するために、要因間および質的分析と数的処理の間のクロス集計による分析が必要である（未実施）。

障害者に対する意識は一般的には、たぶん次のようなステップを踏んで、最終の福祉社会の構築（ステップ6）まで到達するであろう。今回の調査では対象となった小学生や中学生は、ステップ1～ステップ5までが混在していたと思われる。今回の調査では、特に障害者との出会いによって、心理的に揺さぶりをかけられ、さまざまな反応を示すステップ4が回答に現れてきていると推測される。中には、ステップ5まで意識が高められている者もいて、積極的な提言が出されているのだろう。

要するにステップ1にとどまる小中学生も多く、ステップ4で拒否的なまま、その次の段階に進まない者もいる。ステップ3までは技術的には可能でも、ステップ5～6に引き上げるには、かなりの困難が予想される。



2. 学校教育における共生意識の限界

調査の限界と学校教育との関係について説明を付加する。調査は一定の条件下で一斉に同じ方法で実施するのが理想である。しかし実際には調査自体を学校側に断られる場合も多い。積極的に授業の時間に一斉に実施した学校（a小学校、b小学校、B中学校）もある。A中学校のように収集箱に生徒が入れる方式をとる場合もある。前者は無関心や拒否的な児童・生徒も結果に含まれるが、後者はこれらが抜け落ちる可能性がある。調査方法が一貫しないが、学校教育の場での調査のため限界を認めながら実施せざるをえない。

中学生は小学生に比較して障害者に対する気持ちが希薄な傾向が見られる。進学など学習中心の生活を強いられる現実に直面し、しかも思春期という関心が自己に向くライフステージにおいて、自分とは関わりの少ないであろう障害者の方を一斉に向くように期待することが無理なのかもしれない。